代理店と保険会社の変遷
ホトトギスの句で言葉遊び

『織田が捏ね（こね）、羽柴が搗きし（つきし）天下餅、座りしままに食うは徳川』…。

これは皆さまもご周知の戦国三大武将の落首ですが、このように揶揄されてしまった徳川家康の身になれば、かなり心外な表現でしょうね。

いつの世も、政治・経済・社会は、大なり小なりこの落首に示されるような流れが常であるのでしょうが、傍には、当事者の実情やその立場を理解するよりも、滑稽な物言いの方が受け入れやすいのかもしれません。

では、代理店と保険会社の関係の変化を、戦国三大武将の別の川柳になぞらえて遊んでみましょう。

予め、ここからは私の一方的な例えの言葉遊びですので、決して事実ではありませんのでご了承ください。

私がこの業界に入った頃は、家康の『鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス』と表現できるでしょうか。

潮目を待つがごとく、保険会社は代理店が動いてくれるまで辛抱強く共存の姿勢を維持していたように思います。

熱心に代理店に情報を提供し、ある時は行動の指針を示し、あの手この手で代理店への協力を求めてきました。

それでも、思うほどに代理店が動いてくれない。笛吹けどネコ踊らずの繰り返しでした。

それは、代理店にとっては平穏な期間であったのかもしれません。

しかし、社会的使命を担う保険会社は、この現状を変革しなくては物事を先に進めることができません。

一転して、代理店の整理（淘汰）といった施策を行ったように感じます。

信長の『鳴かぬなら殺してしまえホトトギス』という表現は少し言い過ぎかもしれませんが、それは、次の布石の第一歩であったのかもしれません。

代理店にも決断、工夫、辛抱が
戦国三大武将に経営を学ぶ

秀吉の『鳴かぬなら鳴かせて見せようホトトギス』…これが最も難しく、実行するには、保険会社の姿勢を明確にする必要があります。

布石としては十分に効果がありました。

代理店手数料までも保険会社の施策や意向で影響を受ける代理店は、生き残るためにはその施策で鳴かざるを得ない訳ですが、さてさてホトトギスとなったか否かは、答えの出ないところでしょう。

ちなみに、ホトトギスの鳴き声は「テッペンカケタカ」に聞こえると教わりました。保険会社の施策は、本当に「天辺駆けたか？」…の結果待ちでしょう。

【親の心子知らず】

さて、他人事のように例えてしまいましたが、省みると弊社（私）にも十分に当てはまるものです。

もちろん、戦国三大武将に例えるには、あまりにも些細なことですが、決断（信長）、工夫（秀吉）、辛抱（家康）の連続であると感じています。

前職のサラリーマンの頃は、不満は言葉にすれば済んでいました。

しかし、今は、天に向かってつばを吐くようなもので、不満は自らに降りかかってきます。不満を解決する立場であると痛感します。

そのため、ある時は決断し、ある時は工夫して、あれやこれやと試みます。

加藤清正の『鳴け聞こう、わが領分のホトトギス』になぞれば、各自の声を聞いて自分の力の及ぶ範囲で対応していくこともあります。

それでも、思うように事が進みません。そうなると、次の一手が見つかるまでは辛抱するしかありません。

こうなると、松下幸之助の『鳴かぬなら、それもまたよしホトトギス』を、都合よく拡大解釈して開き直るしかないのかもしれませんね。

当事者の立場による相互理解は、やはり難しいものなのでしょう。

『親の心子知らず』のことわざも、親となった立場になれば、つくづく正にその通りと、『親ばか子狸（たぬき）』だった自分に言い聞かせます。

・・・ん。

≪35≫

「ほけん」「あんしん」「50音締了の“ん”」

株式会社一期（いちご）保険事務所
代表取締役　石井 裕二
ＨＰ▶http://homepage2.nifty.com/ichigo/

夢 26

株式会社ドリームパートナーズ
代表取締役　藤本 准一
【ＨＰ】http://www.dream-p.jp

みなさんこんにちは。ドリームパートナーズの藤本です。今回は生命保険のお話を少しさせてもらいたいと思います。先日お客様から解約のお申し出がありお手続きにお伺いいたしました。経済的な理由から保険料の支払いが困難だということでした。

9月26日にお客様のところへご訪問し、生命保険には猶予期間があるので解約をせずに口座を止めていただき、翌月1日の失効を待って解約のお手続きをしましょうとご提案させていただきました。お客様は面倒くさがられましたが、せっかくなので猶予期間を有効に使って少しでも有利な形で解約をして下さいとお話をし、ご納得いただきました。

生保の猶予期間使う
期間中に契約者が死亡

10月になって奥様から電話がありました。9月27日にご契約者様が無保険のバイクで単独事故を起こしお亡くなりになったというお話でした。生命保険はどうなってますか？というお問い合わせで、9月の末日までは猶予期間があるからお支払いできますとご説明をさせていただきました。

私もお電話をいただいた時は頭が真っ白になりましたが、あの時解約の手続きをしてしまわないで本当に良かったなと心から思いました。

後日、保険金の請求書類をお届けにあがり、ご家族の方といろいろなお話をしました。本当に感謝をしていただき、私も保険金をお届けできることにほっとしたと同時に、少しでもお客様のお役に立てたことに保険マンとして良かったなと思えることができました（もちろん決して喜ばしい事案ではありませんが）。保険の保全の大切さを改めて痛感した出来事でした。

現代人のカルテ

知っておきたい「病」の話

社会医学環境衛生研究所所長
谷 康平

272

人類の歴史は飢餓との戦い

宇宙に行くのが大好きな（と思います）若田光一さんが船長を務める「ソユーズ」が11月7日旧ソ連のカザフスタン共和国から打ち上げられました。かつて米ソ2超大国が宇宙開発で争っていた時、米国のアポロに対してソ連の宇宙船がソユーズでした。

「ソユーズ」とはロシア語で「連邦」を意味し、1991年12月21日に崩壊したソ連という国名は「ソヴィエト社会主義共和国連邦」の略称だったのです。その「ソユーズ」が打ち上げられたのが11月7日。

1917年11月7日といえば、世界初の共産主義革命がレーニンとトロツキーによってなされたあの「ロシア10月革命」の記念日。（因みにレーニンはスイスの資本家から金塊を受け取り革命資金にし、トロツキーは米国で新聞記者をしていたことは周知の事実ですから、共産革命の主人公が資本家とつながりがあったのは否定できません。世界の覇権が英国から米国に移行する過程で、米国を大きく育てるためにそのライバルとなる共産国家を用意したともとれます）

さて、前回取り上げた糖尿病について考えたいと思います。

糖尿病はインスリンという膵臓のホルモンの働きの低下が引き金になって生じる代謝異常であり、全身の血管がぼろぼろになってしまう病気です。

インスリンは血液中のブドウ糖の値を下げるのですが、血中ブドウ糖は消えてなくなるのではなく骨格筋や肝臓に糖原（グリコーゲン）として蓄えられます。

即ち、ヒトを含む動物は地球に誕生して以来、いつも「飢餓」と戦っていました。食べ物がなくて個体が死亡するどころか、その種全体が滅亡してしまったことは恐竜の例を見れば明らかです。

ですから、たまたまお腹一杯に食べられたら、次いつ食べられるか分からないので、できる限り体内に取り込んで万が一に備えるのです。その役割を担っている重要なホルモンが「インスリン様」なのです。

田舎に行くと気づきます。「コンビニがない」「ファーストフード店がない」、お腹が減ったからと言って24時間、食べ物を入手することができるのは21世紀の日本においても、必ずしも当たり前ではないのです。

コンビニに行くにも車で30分以上走らなければならない地域もまだまだあるのです。逆に言うといつでもどこでも食べ物があるということは実は不自然なことであることが分かります。

私たちの体は長い時間の経過の間に飢餓対策を取ることが可能になっていたのです。

ひどい空腹（血糖値50～60mg/dL以下）になると低血糖症が見られます。まずドキドキ、頻脈、発汗、ふるえなど交感神経刺激症状が見られ、ついにはけいれん、異常行動、意識障害などの中枢神経症状まであらわれてきます。

血糖値が40mg/dL以下になると昏睡状態になり、それが5～6時間続くと、脳に後遺症を残す可能性があるほどです。

糖尿病患者が意識をなくした場合、高血糖か低血糖かがすぐに検査・診断できない時にはまずブドウ糖を静脈注射するのが一般的です。高血糖より低血糖の方が圧倒的に危険性が高い、即ち後遺症を残すおそれが大きいからなのです。

前回にも書きましたが「カロリーゼロ」飲料は高くなっていない血糖値を無理に下げてしまうという危険なものであることを重ねてお伝えしておきます。

「食べたら太る、飲んだら太る」のが当たり前です。「食べても太らない、飲んでも太らない」のはそもそも異常であるとピンとこないのが異常ではないでしょうか。

カロリーゼロは無理に血糖値を下げる恐れ
高血糖より怖い低血糖

飲んだら太るのは当たり前